

森は生きている

石田千 小説家

八戸ブックセンターの開館5周年、おめでとうございます。

作家の木村友祐さんにお声をかけていただいて、開館まもないときに、お伺いいたしました。

高い天井、おおきな窓にさしこむ、青森のうつくしい光。くつろいだ肩で本を手にとるおとなたち。深い息で、絵本に顔をうずめる子どもたち。

東京の書店にはいるときは、いつも端正な庭を思います。けれど、八戸ブックセンターは、もっとおおらかで、やわらかに迎えてくれる本の森でした。

子どものころはぜん息があり、よく学校を休みました。熱を出すたび、父も母も、本を買ってきてくれました。

洋裁の仕立てをしている母は、色のきれいな絵本が多く、銀行員の父は、伝記や勉強に近い本が多かった。寝ているだけの子どもは、とにかく退屈なので、買ってもらったその日のうちに、読み終えてしまいますから、きりがいい。そうして、とうとう父は、さまざまな子どもむけの全集を、書棚にどーんとならべてくれたのでした。

どーんとならぶ本を、つるつると読んでいく。そうすると、気に入って、くりかえし開くものがありました。そのなかのひとつに、森は生きている。

ロシアの物語と記憶しています。さびしい暮らしの少女が、わがままな女王のほしがるマツユキ草をさがしに森にはいると、森の精たちがいて、助けてくれる。物語の内容よりも、挿絵のなかの森にあげられました。開くたびに、パジャマすがたで深い森をたずね、焚火をかこむ森の精に出会いました。

森も、書店も、たくさんのいのちが集います。森の倒木には、苔がむし、きのこがはえて、虫が巣くう。倒れてもなお、森と共生しています。おなじように、書店にならぶ本の作者には、生きているかたも、亡くなられたかたもいらっしやる。それでも、きょうも、あたらしい読者と出会いつづけています。

世界がどんどん変化していくなか、森も、書店も、むずかしい問題がたくさんあることと思います。どちらも、その場にいるものたちだけでは、力尽きてしまう。ひとがたずね、手入れをして見守ることが大切です。

五年を経た、八戸ブックセンター。ゆたかに、やさしい森に育っていることでしょう。ふたたびお伺いできる日を、こころ待ちにしています。どうぞみなさま、こころおすこやかに、お過ごしください。

あらためて、開館5周年、おめでとうございます。

石田千 sen ishida

小説家

オープニング記念イベント「土地と声」(2016)

1968年福島県出身。2001年『大踏切書店
のことで』で古本小説大賞受賞。2016年
『家へ』(講談社)で鉄犬ヘテロトピア文学
賞受賞。著書に『箸もてば』(筑摩書房)、
牧野伊三夫との共著『月金帳 2020 April
-September 第1集』(港の人)など。

